

東京都千代田区神田駿河台3-2-11
連合会館1階 原水禁気付
さようなら原発 1000 万人
アクション実行委員会
電話 03-5289-8224
FAX 03-5289-8223
郵便振替 00100-8-663541
加入者名
「フォーラム平和・人権・環境」
*通信欄に『さようなら原発』と明
記ください。

さようなら原発 1000 万人ニュース

第39号
2026年1月5日



さようなら原発 9.23 全国集会 脱原発と気候正義の声をあげる

記録的猛暑がようやく落ち着いた9月23日、東京・代々木公園で「さようなら原発9.23全国集会」とともに声をあげよう！脱原発と気候正義のために」が開催され、全国から約4500人が参加した。市民、被害当事者、若者、研究者らが次々と登壇し、原発に頼らない社会をめざす決意や、気候危機の深刻さを訴えた。

集会の幕開けは、シンガーソングライターYaeさんの澄んだ歌声。呼びかけ人でもある古今亭菊千代さんが司会進行し、同じく呼びかけ人の鎌田慧さん、落合恵子さんが脱原発への強い思いを語った。続くスピーチでは、「ワタシのミライ」の川崎彩子さんが「気候正義と脱原発のため、市民一人ひとりが声を上げ続けよう」と呼びかけた。

哲学者の高橋哲哉さんは、原発が「過酷事故」「被曝労働」「先住民への犠牲」「放射性廃棄物の押しつけ」という「4つの犠牲」の上に成り立っていると指摘。「政府が原発に固執する背景には核兵器製造能力の温存があるのではないか」と述べ、地球沸騰化を止めるための連帯を訴えた。

パネルトークでは若い世代の声が印象的で、No Youth No Japanの足立あゆみさんは、原発立地で育った経験から社会運動に関わるようになったと語った。 Fridays For Future Tokyoの門脇颯生さんは世界各地で見た気候不正義を紹介し、「原発も都市と地方で不平等を生む構造だ」と訴えた。また、原木椎茸農家の飯泉厚彦さんは、東電福島第一原発事故後の深刻な被害と、消費者に支えられながら続けてきた経験を語った。反貧困ネットワークの加藤美和さんは、排外主義に対抗しながら在留資格のない人々を支援している現状



を報告し、原発と共に「いのちの重さ」を伝えた。パネルトークの最後に呼びかけ人の藤本泰成さんが「若い世代には正義がある。原発でも気候危機でも、未来を壊さないでという声に私たちは応えていかなければならぬ」と強調した。

海外からの連帯として、台湾緑色公民行動連盟のメンバーが登壇し、「台湾では今年5月に最後の原発が停止した。福島の事故を忘れず、脱原発を実現してきた」と述べた。福島原発告訴団の中路良一さんは、最高裁による東電元幹部の無罪判決後も闘いを続けていく決意を表明した。

終盤では、柏崎刈羽原発の再稼働を県民投票で問う活動や、関西電力で使用済み核燃料の貯蔵能力が逼迫している状況など、各地の課題が報告された。1500回以上東電会見に参加している「おしどりマコケン」の漫談で会場が和んだ後、参加者は渋谷・原宿の2コースに分かれてパレードに出発した。

今回の集会は、脱原発と気候正義を結びつけ、世代を超えて協力しながら持続可能で命が尊重される社会をめざす——その意思を再確認する場となった。

福島原発事故から15年 さようなら原発呼びかけ人のメッセージ

儲けるためだけの原発政策



鎌田 慧

昨年12月上旬、青森県の太平洋岸を襲った震度6強の地震は、2011年3月、福島原発巨大事故を発生させた「東日本大震災」の恐怖を再現した。この北海道・三陸沖は歴史的にも、大海嘯の多発地帯だ。今回は幸いなことに大災害に至らなかったが、「燃料プール水あふれる 六ヶ所・再処理工場 放射性含む650リットル」(「朝日新聞」12月10日)という、危険な状態だった。

青森県の太平洋岸には、ウラン濃縮工場、プルトニウムを取り出す核燃料再処理工場、MOX加工工場が立地している。一口に「核燃料サイクル基地」と呼ばれ、さらに低レベル放射性廃棄物の永久処分施設も稼働し、高レベル放射性廃棄物も、再処理工場の原料として、搬入、貯蔵されている。



日本原燃ホームページより

この地域はいくつかの沼に囲まれ、素人でも地盤軟弱に不安を感じさせられる地域だ。しかも、すぐ近くの海底を活断層が走っている。この地域に、世界でもっとも危険な核基地が建設されてきた。わたしは「下北核半島」と言っているのだが、さらに原発が一基(停止中)、基礎工事中が一基、かつては東京電力10基、東北電力10基、合計20基の原発建設とする計画が発表されていた。

ほかにも、さらに北上したむつ市に、使用済み燃料の中間貯蔵場があり、半島先端の大間町には、MOX燃料専用原発が建設中(未完成)。そして、周辺に沖縄の嘉手納米軍基地と並ぶ巨大米軍基地ばかりか、陸、空、海の自衛隊とアンテナ基地。つまり核と軍事が一体化し

た地域だ。平和な時代でも危険であり、戦争になつたら沖縄同様、もっとも危険な地域である。

「夢の原子炉」もんじゅは、ナトリウム漏れで敢えなく退場。核再処理工場の後を引き受ける「もんじゅ」が消えて、再処理工場も撤退の時だ。着工から32年が経つても、未だ完成しない再処理工場！まるで生きている伝説、つまりは幻しの、虚構の工場なのだ。

福島事故は「原発依存度を可能な限り低減する」という決意をもたらした。岸田自民党内閣は「最大限活用」と逆転させた。原発回帰。空に向かって唾を吐く行為。自殺行為だ。それも儲けるために。柏崎刈羽原発再稼働。そして泊原発再稼働。さらに東海原発再稼働。電力会社、電機メーカー、ゼネコンなどが、儲けるために。そのためだけに。非人道的、反道徳的な決定だ。日本を滅ぼす破滅の発電所、原発と再処理工場。

誰もが深呼吸できる地球に



古今亭菊千代

近年、たくさんのフリーズドライ製品がスーパーとコンビニエンスストアで販売されています。お湯を注ぐだけで出来てしまうのですからそれは便利です。水で戻しても大丈夫なので災害時などの非常食としては最高です。軽いし小さく固まっているので山登りなどにも最適ですね。おみそ汁だけかと思ったら、ご飯や牛丼、麺類、ハンバーグ、山芋や大根おろし、果物まで、ありとあらゆるもののが揃っています。テレビで売り場に来ていた女性にインタビューしていました。よく購入されるんですか？と聞かれた女性は「だってラップかけて電子レンジとか面倒でしょう。これはお湯かけりや良いだから」と答えていました。電子レンジが面倒と言う時代になったのかとびっくりです。人間はいくら万物の靈長とはいえ、あまりにも贅沢でわがままになりました。手間をはぶくこと、美への執着、健康の維持、交通手段などの時間の短縮、お金儲け、そのために色々なものを犠牲にしてきました。自然を壊し、動物達の生活環境を変え、その為に害獣になってしまつ

た動物を殺し。

この辺で踏みとどまり初心に帰ることが必要です。そう言いながら私も携帯やパソコンを使いそれぞれに充電しなくては生きていられない身体になっていますが、でも! 誰かの犠牲で成り立っているものはやめにして、誰もが大きく胸を張って深呼吸できる地球にしていかないといけません。熊に襲われるのはイヤです。映像で見ても怖いです。でも目に見えない放射能汚染でじわじわと苦しめられている人達、未だ帰宅困難になっている方々の辛さは他人事にしてしまっているのではないでしょうか。

原発はいりません。原発は猶続で制御できないから。

長屋嘶には熊さんも源さんも登場しますが、原発のゲンさんはいりません!

中村敦夫の朗読劇を推薦する



佐高 信

役者、キャスター、ジャーナリスト、政治家と、さまざまな顔を持つ中村敦夫が『出版人・広告人』という雑誌の12月号で語っている。「私は『在日本人』—中村敦夫という生き方」の最終回である。

「原発問題というものは説明しても口だけじゃわからないんですよ。身边に被ばくした人がいたりすれば、知る動機になりますが、知識として知っても人は動かない」

そう考えて中村は「みんなが興味を持って聞いてくれる朗読劇にしよう」と思い、迷い悩んだ末に、中村が小中学生時代を過ごした福島の方言で書き出した。

「老人が生い立ちを語る。労働者になって原発に勤める。そこに原発がドーンと爆発する。その人生を2時間で振り返る」

これが『線量計が鳴る 元・原発技師のモノローグ』である。

方々から声がかかって全国をまわったが、中村も85歳になって、もう無理はできない。そう思っていたら、DVDをつくってくれる人が現れた。「徳島のお寺にテレビ局のスタッフを内緒で呼んできて、2日がかりで撮影して」作つたらしい。

これもアツという間になくなってしまったが、持つてい

る人を中心に上映会を開いて、反原発の輪を広げたらいいだろう。

黒田征太郎が表紙絵を描いた『朗読劇 線量計が鳴る 元・原発技師のモノローグ』(而立書房)という本も出ている。

今回、私は斎藤真の『関西電力「反原発町長」暗殺司令』(宝島社)を改めて紹介するつもりだった。「ミステリーを超えた戦慄ノンフィクション」である。しかし、ちょっと刺激が強すぎるかなと思って、中村の朗読劇を推薦することにした。決して退屈な独り語りではない。



あの衝撃を決して忘れない!

藤本泰成



中央官庁を指す言葉に「省」という漢字がある。約1300年前の律令制度の成立から使われてきた。古代中国の宮中におかれた官庁を表す「省中」が語源らしいが単にそれだけではないだろう。「省」という言葉は、論語に「吾日に吾が身を三省す」と書かれるとおり、自分の心に立ち返り考える意味を持つ。すべてに省みることは重要だ。加えて「省」は省くとの意味を持つ。「何度も過去を見つめ直し誤りは正す」三省の意味はそう解釈すべきだ。さようなら原発実行委員会は、2011年3月の福島第一原発事故以降「脱原発」を基本に省庁交渉を繰り返してきた。しかし、私たちの思いは受け止められていない。すでに原発事故から15年が過ぎようとしている。政府・自民党は、経済産業「省」は、この事故をしっかりと「省みて」いるのだろうか。そして、その結果として何を「省いて」きたのだろうか。私たち市民には全く見えない。見え



2025年12月10日対政府要請行動

ないどころか、「『いきほひ』まかせの原発回帰」(2025年8月31日付朝日新聞「日曜に想う」)が、いまやしっかりと目に映っている。あの時、政府・自民党は「可能な限り原発の依存度を下げる」と明言した。福島原発事故の衝撃的な状況に、誰しもがそう言わざるを得なかった。いや、日本社会全体がそう確信した。しかし、政府・自民党の舌の根はすっかりと乾ききってしまい、日本社会もすでにあの衝撃を忘れてしまったのだろうか。少なくとも私にはそう見える。「忘却はよりよき前進を生む」とはニーチェの言葉だ。都合の悪いことを忘れてしまうことが、新しい前進を生むのだろうか。そうではない。都合の悪いことは、いつかまたやってくる。省みて省くことは、いつかまたやってくるであろう都合の悪いことへの対処に違いない。「脱原発」は日本社会を変える。私はそう



確信して、
決してあ
の衝撃を
忘れない。
2011年
3月11
日の福島

第一原

発事故を、2011年9月19日の明治公園を、そして2012年7月16日の代々木公園を、忘れてはならない。

東電福島原発事故から15年

武藤類子

GX推進法、脱炭素電源法の制定、新エネルギー基本法の改定が行われて以来、社会の「原発回帰」を歓迎



する風潮が一気に広がったようを感じる。

しかし、東電福島原発事故は終わっていない。手に負えない収束作業はますます困難さを増し、廃炉の見通しは、国や東電にも全く見えないのが本当のところだろう。更には、立ち入ることができない地域や生活の再建ができるない大勢の被害者が今も存在し、汚染水や汚染土などの放射性物質を再拡散させ、小児甲状腺がんは増え続け、何十という裁判を起こされている。実際に原発の再稼働は思うように進んではいないし、世界の原子力産業の衰退は明らかであり、日本での電力は不足してはいない。

それでも尚、国や電力会社は原発を存続させるのに、なりふり構わずあの手この手を使わなくてはならない。それが、デブリの取り出しであり、被ばく影響の過小評価や放射線への抵抗を無くす「理解醸成」というプロパガンダであり、裁判官との癒着であるように思える。福島の復興のためという物語が都合よく使われ、その実は被害者の健康や人権、尊厳を奪っている。

東電福島原発事故から15年、原子力が持つ理不尽と暴力的な差別構造、その犠牲を思い知らされる日々だった。そんな原発にもう振り回されたくない。原発からの一日も早い脱却のために、私たちはもう一度集い、話し合い、知恵を出し合っていこう。どんなに高くそびえる権力であっても、小さくても屈することのない人々の思いを簡単に消すことはできない。

3.7 脱原発全国集会をそんな時間にしたいと思います。是非のご参加を！

さようなら原発 1000万人アクションとは

東日本大震災、福島第一原発で過酷な事故が起こったことで、「脱原発を実現し、自然エネルギー中心の社会」を築こうと、内橋克人さん、大江健三郎さん、落合恵子さん、鎌田慧さん、坂本龍一さん、澤地久枝さん、瀬戸内寂聴さん、辻井喬さん、鶴見俊輔さんが呼びかけ人となり、「さようなら原発」一千万署名 市民の会」が立ち上りました。

呼びかけ人の声に応え、多くの市民が集い署名をはじめとした活動を行っているのが、さようなら原発 1000万人アクションです。

*今回掲載できなかった、澤地久枝さん、落合恵子さんのメッセージは、次号に掲載を予定しています。